

反障害通信

15. 8. 11

53号

アベノ政治のダブルスタンダード

今、戦争法案の国会審議が進む中で、「説明不足」というようなことばが出てきています。わたしはそれはアベノ政治をとらえられないところから来ているのではないかと思うのです。

欧米はナチス・ドイツ批判やムッソリーニ・ファシズム批判をそれなりに為しきり、その反省の上に戦後を出発したので、保守とファシスト・極右が分離しています。ところが、日本は侵略と植民地支配とそれに続く大戦時、天皇制ファシズムという形をとったのに、天皇の戦争責任を不問にし、それと結びつく靖国神社も残しました。ですから、保守の中にファシズム勢力が残ったのです。で、そもそも保守自民党といっても、リベラルな部分から、保守本流、ファシズム的勢力とかなり巾広い層として存在したのです。それで長期自民党政権時代にも、その勢力の中でどちらが主導権を握るかというせめぎ合いがあったのです。小泉首相は靖国参拝をして、中国・韓国関係が険悪な状況に陥りました。で、小泉の後を継いだ、第一次安倍内閣では、安倍首相は靖国参拝を封印しました。これは、保守政治の支持基盤は財界で、財界としては、資本の海外進出や市場の確保のためには、紛争的なことを避けるということを要請し、アベもその要請に答えたのです。

ところが、民主党政権時代に、アベもその中心にいる「日本会議」などというファシスト勢力が自民党の中で力をもってきました。そういう中で、自民党の外にファシスト的な「維新の会」ができて、アベとの連携をめざしましたが、アベはあくまで、自民党の掌握を試みます。衆議院の小選挙区制度の中で、派閥解体が進み、自民党幹部が公認権、金を握るようになり、アベノ政治が自民党を牛耳ったのです。ところが、自民党という保守的性格を併せ持つ政党においては、すなわち財界を基盤にする政党は、財界のための政治も求められます。断っておきますが、保守は単に財界のための政治というわけではなかったのです。経済成長がそれなりにあった時代は、財界・企業の利益が一部労働者にも及ぶということが可能であり、財界・企業の利害が「国民の利害」に一致するという幻想がある程度可能だったのです。いわゆる「国民の命と生活を守る」という幻想的スローガンが一定有効だったのです。しかし、グローバル化の進行は、新しい市場空間を見いだせなくなります。経済成長などということが幻想になっていったのです。保守の基盤が揺らいでいるのです。今度は、国内に収奪を見いだして行かなくてはなりません。だから、中間層の貧困化、貧困層が「生活できない」事態に陥っています。

アベノミクスの政治は、結局財界のための、財界に奉仕する政治です。労働者派遣法改悪や生活保護・福祉の切り捨てにそのことは端的にあらわれています。

保守のよりどころとする経済成長という幻想が崩壊すると、危機あおりと差別的排外主

義・国家主義でからめとらなくてはならなくなります。これがファシズムです。

ところが、ファシズムと戦争は、一部財界、軍事産業などの利益に一致しますが、膨大な赤字財政の経済の破綻をもたらします。また、国内的にも保守政治を揺るがす事態になります。

ですから、保守とファシズムのダブルスタンダードで、どちらが出て来るのか、押したり引いたり、ころころ替わるのです。ですから、一体どっちなんだという事態になります。

保守としては、「国民の命と生活を守る」をかかげます。ですから、あくまで自衛のための戦争しかしない、憲法を守るということをかかげます。ところが、ファシスト的には、国民より、国家が上位にあるのです。「国家のために死ぬる国民」を求めるのです。国家の威信を守る、たかめるのが第一です。そのためには戦争も辞さないのです。

戦争法案においても戦争をしないというところで歯止め論を出します。一方で、ファシスト的には国家がいつでも戦争できる状態をと、フリーハンドを主張するのです。

戦争法案を成立させるために中国脅威論を出したいのですが、保守・財界としては、そんなことやられたら、中国に進出している資本と市場を考えたら、大変なことになると制止にかかります。

何を言っているのか分からない事態も、タテマエとしての保守、ホンネとしてのファシズムのダブルスタンダード政治ということを押さえると、問題がすっきりとらえられます。

首相補佐官の「失言」、アベチルドレンの暴言は、アベが支持基盤の保守の意見もタテマエ的に尊重しなければいけないところで、アベノホンネを代弁して出しているのです。このあたり、わかりやすくするために一覧表を作ってみました。

地方議会においても、戦争法案に対する反対決議や慎重意見が出ていますが、これは保守としての自民の巻き返しです。

戦争法案の衆議院通過で、ますますファシスト的ホンネを出してきています。タテマエとしての保守ではなく、財界の利害を代弁する保守が、地方の反乱も含めて、どう動くかが問題になっています。実際に参議院過半数や衆議院での三分の二を割り込む投票に至る反乱が起きるか、公明党への平和主義を維持している学会員が突き上げる行動が出て来るかが、戦争法案が成立の可否を握っています。そこへ動かす力は民衆の動きであることは言うまでもありません。来年の参議院選挙でしっぺ返しをとかという意見が出ていますが、そもそも第一野党の民主党が、安保法制で意見がまとまらない中で、一体どうして一度作られたものを覆していくのか、こちらの道は展望が見えません。違憲訴訟で、これほど法をこけにされた司法が違憲判決を出して行くことは考えられますが、一番肝心なのは、注目しなければいけないのは、ファシズムの波です。ヘイトスピーチ、ヘイトクライムを民衆が対峙して、カウンターとして押さえ込んでいる運動があります。そして、今までにない、「自立した」個人による運動がもり上がっています。この新しい形の「とにかく声をあげよう」という直接行動が、ファシズムの登場への抑止として働いていくことが、一番肝要です。間接民主主義を超える直接行動がどう展開していくかが、政治を動かす大きな力になっていくでしょう！

(み)

付録 表「アベノ政治のダブルスタンダード」参照

インターネットからは <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/adsnews-53-shi.pdf>

読書メモ

今回は、宿題の仕上げにあたる集中作業中で、原発関係の本とアベノミクス関係から経済を押さえる本を読みました。そして沖縄の辺野古基地建設が焦点化している中で急遽、映画を観る中で読んだ本です。そして、戦争法案とリンクした原発関係の本に続きました。

たわしの読書メモ・・ブログ 295

・添田孝史『原発と大津波 警告を葬った人々』岩波新書（岩波書店）2014

フクシマ原発震災の時に、使われていたことばがあります。「想定外」ということばです。その年の流行語のようになったことばです。

この本を読んでいると、「よくも白々しくそんな言葉を東電や関係者が使えたものだ」という怒りが湧いてきます。津波被害予測ということが、いろんなところで語られ、東電や関係者はそれを十分に知りながら、むしろ一生懸命に抑え込もうとしてきたのです。

そして、電力会社と学者、天下りの構造も含めた官僚との癒着の中で、情報隠蔽・操作が行われてきたその結果として、まさに人災としての原発震災が起きたのです。

さらに、その事故の究明・検証もちゃんとしないで、再稼働や新たな原発の建設、輸出さえなそうとしています。地震学の進展の中での耐震性での警告をないがしろにし、津波被害での警告をないがしろにし、今度は川内原発の火山噴火の警告を無視しようとしているのです。なぜ、このように同じことを繰り返すのでしょうか？

この本の中にも書かれているように、自分が担当しているときの事故の起きる確率性という無責任の構図の中で、企業の金儲けに練り込まれているのです。

フクシマ、それ以前のスリーマイル、チェルノブイリからですが、いかに事故か起きたら、悲惨な状態になるかを考えたら、原発などというものが、存在すること自体がおかしいのです。政府事故調で、事故当時の所長であった吉田さんが「東日本全滅を想起した」とか言っているのです。そんなものを、なぜ再稼働できるのか、信じられません。しかも、核のゴミをどうするのか、まさに命と生活を破壊する金儲け主義の極といえることなのです。

情報隠蔽や情報操作がいかに膨大な害をもたらすのかということ、フクシマは示しているのです。特定秘密保護法などという真逆のことをやっているのですが、むしろ、重大被害につながる情報隠蔽や情報操作などをしたことへちゃんと責任をとらせることが必要です。わたしは刑罰ということには、むしろ否定的な立場です。なぜなら触法「犯罪」といわれることの多くは、差別の中で犯罪に追い込まれるということがあるからで、「社会」も罰することなしに、この責任を問うことはおかしいからです。しかし、情報隠蔽や操作などという「権力犯罪」と言われることは別です。これらは、差別する側のひとが引き起こすことで、しかも人類に対する罪のような重大な被害を引き起こします。そこにおいては、きちんと責任をとらせねばなりません。

もうひとつ、書いておきます。きちんと歴史をとらえ返して反省していく、そのことをちゃんとしていかないと、「歴史のシニカルなしっぺ返し」がきます。「東日本全滅」を想起した吉田さんが、そもそもこのひとが東電本社にいるときに、そこまでやると経営的に落ち込むと、津波被害の警告を握りつぶしたひとなのです。

まさに、今、政治は過去の反省を抜きにした歴史修正主義者によって、うそとごまかしと無責任の強行政治で、戦争への道を突き進もうとしています。原発の再稼働もまさにそのようなところで象徴的なせめぎ合いにあります。なんとしても阻止しないととりかえしのつかないこととなります。

この本の著者は、元朝日新聞の記者で、マスコミへの批判と、自らのマスコミ人としての反省もあってか退社し、国会事故調の事務局を担い、フリーのジャーナリストになったひとです。実に細かく丁寧に資料を引き出し、検討してこの本を書いています。

いつものように抜き書きをしていけば、みなさんに情報を提供できるのですが、実に細かい調査になっているので、部分的に抜き出しても、わかりにくくなります。実際に自分で手にとって読んで下さい。いかに、ひとが欺瞞的に行動し得るのかという観点からも貴重な資料です。

たわしの読書メモ・・ブログ 296

・三上智恵『戦場ぬ止み(いくさばぬとうどうみ): 辺野古・高江からの祈り』大月書店 2015

「戦場ぬ止み」の映画上映とほぼ同時に出版された本です。

映像は、ナレーションで思いを語ることはありますが、そのまま客観的に撮っていくということにもなります。勿論この監督は、基地建設反対という立場をはっきりもって取材していて、その思いが伝わってくる映像なのですが、映画の中で、どうしてこの映像を使ったのかなとかいう思いを抱いたところが、この本の中で、明らかになってきます。著者の心情が示されているというところで、映画とセットで読んで欲しい本です。

もうひとつ、基地反対という立場をはっきりもって取材しているのですが、基地建設に反対しているひとたちに反感をもっているひとたち、容認させられているひとたちの中にも、「もう来るな」と言われても入っていくし、そのひとたちの「容認していく心情」というところをとらえ返そうとしているのです（そして、「来るな」というひとたちが笑いながら言っている、要するに、むしろ「めげずに来て欲しい」というような思いさえ抱かせるようなひとなのです）。とりわけ、辺野古地区自体は、総体としては基地反対を押さえ込まれたところなのです。それは、沖縄は銃剣とブルドーザーで基地の土地収用がなされた歴史の中で、その中でいかに、少しでも被害を少なくするか、そして被害の代わりに何かをぶんどっていく、というところで基地反対というところを押さえ込まれつつ、したたかに生きる地域なのです。そして、原発立地地区が、漁業権というところから切り崩されていくことと同じ構図で（ブログ 293 野村保子『大間原発と日本の未来』寿郎社 2015 参照）、辺野古の海人が、船を借り上げられ基地反対運動をつぶすために動員されていることさえ起きているのです（今は、海上保安庁が前面に立っています）。そして、その中で最も一目置かれているひとを映画や、本で取り上げています。映画の中では、反対運動嫌いを如実に示しているのですが、そのひとが、この著者に「三上さん、どうする、こんどこそ本当に埋められるよ。今度こそ本当に埋められるよ」と酔って電話してくる、ということが本の中で書かれています。海を愛する海人の本当の思いが伝わって来るのです。そしてオール沖縄で翁長知事誕生につづく衆議院選勝利の中で、「反対運動嫌い」の海人がさしみを注文されて、基地反対のテントに届け、一緒にお酒を飲んで踊っている姿が映画の中に

あります。賛成－反対の構図だけではとらえられない、分断を超えて、海への思い、沖縄への思いをこのひとは映像で描き、本にも書いています。ひとりひとりの仲間を大切にしてい、ひとりひとりのひとの思いをくみ取っていく、それは、時には、沖縄のひと同士の対立として、「敵」として現れてくる機動隊員やトラックの運転手のひとたちの思いもくみ取りながら、心揺さぶる呼びかけや、したたかな活動として運動は進んでいるのです。敵は国家や国家の政治であり、目の前に現れてくるひとたちではないし、まして、容認派ではない、敵と味方の二分法を超える新しい運動の道筋を示してくれているのではないかと思うのです。それは大間原発の運動を担っている前述の著者も同じ事を示してくれています。

この著者は、琉球朝日放送のニュースキャスター・ディレクター時代に、沖縄・東村高江のヘリパット反対運動を描くドキュメンタリー「標的の村」を作り、退社して、辺野古・高江を軸にした基地闘争を記録し続けているひとです。元々民俗学をやっていたひとで、沖縄の文化ということから、沖縄のひとたちの思いも描いています。「沖縄では誰かをあからさまに否定することは極力しない。人を追い込んだら逃げる場がない島で、非難される人よりも、人を責める人のほうが社会から嫌われる、そういう力学がある。加えて、まだまだ「言霊（ことだま）」に対する信仰が広く残っている。」73P

いろんなエピソードが書かれています。どこから書いていけばいいのかわかりません。

本文最後の書き下ろし「22 3人の文子さん」の最後に「私のドキュメンタリーが、政治状況を描きながら人間賛歌になってしまうのは、この女性たちが放つ光が圧倒的な普遍性をもつからなのだと思う。」144P とあります。この本に寄せた、辺野古キャンプ・シュワブゲート前テント村世話人の山城博治さんの「著者の視点の向こう側にいるのは常に、生身で生きて鼓動を打つ一人ひとりの人間なのだとことだ。」147P を引用して置きたいと思います。

この本には、著者の撮影日記のブログが元になっていて、本を買うとインターネットをやっているひとはユーチューブの映像にアクセスできるようになっています。映画と本とこの映像を三点リンクしています。（著者も書いていますが、ユーチューブの映像だけ見ると誤解が起きそうです。少なくとも本やブログの中の文と一緒に読んでもらいたい映像です。）

たわしの読書メモ・・・ブログ 297

・青田由幸／八幡隆司『原発震災、障害者は… —消えた被災者—』解放出版社 2014

この本の amazon 検索の内容紹介に「東日本大震災と原発の過酷事故。／避難所に障害者は見当たらない。／生活と生命を守ることができない。／心身にハンディを持つ人や家族等の実態と課題を今後の災害も視野に提案。」とあります。

『福祉労働』で、原発震災特集を組んだことがあり、そこで、輪郭をいくらかつかんでいました。一部重複しつつ、新しい内容も押さええます。

実際に「障害者」は非「障害者」の平均2倍の死者が出たと広まっているのですが、内容的には、「中途障害」の「高齢者障害者」が多かったということを押さえています。それから、「障害者」の認定を受けていない「障害者」も多く、もっと被害は多かっただろうと

も書かれています。

高齢者からのとらえ返しとしては、実際に津波とか地震の経験のある高齢者が動くことによって、周りのひとを救えたということも書かれています。

ひとことで、「障害者」と言ってもいろんなニーズがあるので、そのニーズに沿ったとらえ返しが必要で、現実にきちんと想定を立てていく必要が書かれています。震災前に、かなり大きな地震があり、その反省会をして対策を立てたおかげで、避難がスムーズに行ったと書かれていたことが印象的でした。そもそも、日常的な地域との関係というところを作っておくことの必要性も、語られています。被災時の避難のための、避難時の生活をサポートする「障害者」の情報開示の問題をどうするのか、ということも詰めて話しておく必要も語られています。

介助者とその家族一緒に温泉に避難したという話が、ひとつの避難のあり方として印象に残った話です。

結局当事者が、関係者と一緒になって、緊急時の避難をどうするのかの議論がもっと必要なのですが、そもそも、原発再稼働の策動のように、避難計画をどうするのか、ということのないがしろにしていく、そしてそれ以前に、そんなものの存在を認めていく、放射線被害が語られながら「野となれ山となれ」式の生き方を強いていく社会のあり方自体を変えていく事が必要になっているのではとも思えるのです。現実には、避難したけれど、家に帰らざるを得ないという「障害者」の置かれている状況自体を変えていかなければならないということと共に。

たわしの読書メモ・・ブログ 298

・中村暁美『長期脳死 娘、有里と生きた1年9ヶ月』岩波書店 2009

この本は、脳死・臓器移植反対の立場のひとから、繰り返し引用されてきた本です。

4人目の初めての女の子が「長期脳死」状態になって、「なぜ、わたしの娘が」という思いから出発しつつも、そして連れ合いや他の子どもから支えられて、格闘した記録です。いろいろな思いが交錯しながら、「脳死はひとの死ではない」ということを、自らの体験として語っています。論理的なことではない感情、ストレートな親の思いが伝わって来ます。

わたしは、子育ての経験がないのですが、そもそも愛ということばも違和を持ち続けているのですが、それでもこの本の中に親の愛ということばを、そして親の子に対する思いということばを、ひしひしと感じられる、そして思いが伝わるとてもすてきな文です。

最近本離れが進んでいるのですが、このような文だと読めるのではないかと思うのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 300

・水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社(集英社新書)2014

この本は、「世界システム論」の中から出てきた資本主義分析本です。わたしは「世界システム論」をマルクス派の経済学の流れから読みました。「マルクスには帝国主義論が無かった」という論説があり、そのことがレーニン帝国主義論として突き出された、とされるのですが、レーニン帝国主義論も植民地支配時代の論で、それに対して、ローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』の「継続的本原的蓄積論」から「従属理論」として展開される

中で、イマニュエル・ウォーラーステインの「世界システム論」が出てきて、グローバルゼーションの時代の資本主義分析として広がり、そのことが、ネグリ／ハートの『<帝国>』やスーザン・ジョージのオルター・グローバルゼーションの論として進んでいるのです。

この著者は、マルクス経済学と世界システム論を切り離しています。近代経済学はマクロな経済分析ができないようで、このひとは内閣府官房審議官などの職に就き、マクロ経済分析を担当していたようです。ひょっとしたら、そのような職を得るために、マルクス隠しをしたのかも知れないのですが。というより、マルクスをアダム・スミスやケインズと同等の資本主義のブレーキ役、抵抗勢力的にとらえ 169P、マルクスの理論を曲解しています。さらに、マルクス経済学もきちんと入っていないようです(マルクスの「利潤率低下傾向の法則」を需要・供給からとらえ返そうとしていることなど 180P)。そういうところで、「資本主義の終焉」を宣告しながら、どういう社会にランディングするのかを示し得ません。このひとは未来像を描けないとしつつ、それでも描いているのは「成長なき資本主義」なのですが、この著者の主張はむしろ「成長なき資本主義へのソフトランディング」なっているのですが、成長のない資本主義はありえるのか、という問題があるのです。ですから、「資本主義の終焉」なのです。

尤も、「世界システム論」自体が覇権的予想学的に収束していったことがあります。

もうひとつ、世界システム論への批判は、国民国家の過小評価と国家論の欠落があるのです。このことはこの本でも、「資本が主人で国家は使用人」 186P (国民国家の過小評価)とか、「国家が団結しなければ、資本主義にブレーキをかけることはできません。」 187P(国家論の欠落・・・*国家はそもそも階級支配の秩序の維持のためにある*)などと書いています。そもそもこれは、わたしは継続的本源的蓄積論の底にある差別の問題をとらえ切れていない、ということなのだと思っています。レーニンが差別の問題を政治手段論一道具論的にとらえていたのですが、その手段論では、反差別の運動は政治利用主義に落とし込まれるのです。ローザの継続的本源的蓄積論には、反差別的なとらえ返しがあるのですが、そのことを今一歩きちんと押さえ深化できていない、そういう中で、今一度、反差別論から現代資本主義論を深化させて行かなくてはならないのです。

たとえば、スーザンジョージは、「もうひとつの世界は可能だ」という突き出しをしていますが、「もうひとつの世界」のイメージがつかめないのです。この著者も「もうひとつの世界」をわからないことにしています。

ここで、問題になっていくのは、共産主義志向をもった運動の総括と、その只中から、「新しい社会」のイメージをマルクスの流れの中から反差別論の深化の中で定立していくことではないかとわたしは押さえています。

だいぶ、読書メモから離れて、自己分析と持論展開に踏み込んでいったのですが、この本は、いくつかの押さえ方にわたしサイドから疑問があるにせよ、現在資本主義分析に、それなりに参考になる本です。とりわけ、アベノミクスの経済成長戦略が幻想・ごまかしの理論であることが押さえられる本です。新書本なので、読みやすいので読んでみてください。

・山田太郎「原発並べて自衛戦争はできない」(「リプレーザ」No.3 2007.7 抜刷) 2011

これは原発技術者として働いていたひとの書いたパンフレットです。原発再稼働の動きが出ていますが、テロやミサイル攻撃ということ再稼働の安全基準に取り上げていません。国会で山本太郎参議院議員も取り上げています。この文が書かれたときは、まだ「自衛戦争」という範囲だったのですが、戦争法案が出されていて、パンフのタイトルも変更しないといけない状況になっています。

実に的確にまとめている読みやすいパンフです。

「教えて！ヒゲの隊長」という自民党の「安全保障法案」説明ビデオがインターネットで見れます。「ひげのおじさん」というのは、元自衛隊員で、アフガン派遣された後、自民党から参議院議員になっているひとです。で、自民党のビデオの中で、某国からの「ミサイル攻撃」を受ける可能性があると言われ脅威を煽ることによって、戦争法案を成立させようとしているのです。その反論のパロディ版(「[あかりちゃん] ヒゲの隊長さんに教えてあげてみた」)も出回っていて、その中で、こてんぱんに論破されています。

原発はテロやミサイル攻撃など想定して作られていません。実に複雑な脆弱な構造なのです。

このパンフの最後に書かれていることで、そのことは端的に示されています。

- A 原発に対する武力攻撃には、軍事力などで護れないこと。したがって、日本の海岸に並んだ原発は、仮想敵(国)が引き金を握った核兵器であること。
- B 一たび原発が攻撃を受けたら、日本の土地は永久に人が住めない土地になり、再び人が住めるように戻る可能性がないこと。

パンフわたしも何冊かまとめ買いしました。まだ在庫がたくさんあるそうです。

連絡は 山田太郎 (E-mail:PXL11443@nifty.ne.jp) 頒価 50 円+送料です。

この文章は、次のブログの本の中に含まれています。

さて、もうひとつわたしのメモを残します。それは国会議事堂内での、警察の対テロ訓練が七月初めにありました。戦争法案を通すための、脅威論的などころの底流を作るという意味もあるのですが、逆効果という面もあります。いったい何を守ろうとしているのか、おそろしくなるのです。「国民の命と生活を守るための安全保障法案」ということを言っているのですが、守るべき順番が違うだろうと思うのです。政治家には政治の責任があります。自分たちがテロを受ける可能性を考えるより、国民をテロから守ることを優先させることです。原発がテロにあったらどうするか、新幹線がテロの対象になったらどうするか、まさにそのようなテロを防ぎようもないのです。だから、原発は廃炉にすることだし、テロの危険性が高まる戦争遂行体制など作ることはないのです。そんなことをさておいて、自分たちを真っ先に守る訓練を、自動小銃や狙撃銃まで持ち出して訓練していることのおかしさを政治家たちは気がつかないのでしょうか？

・小倉志郎『元原発技術者が伝えたいほんとうの怖さ』彩流社 2014

前のブログのパンフと同じ著者、前のブログのパンフの筆名はペンネームです。

前回のパンフはテロやミサイル攻撃を想定していない脆弱性について書いていて、この本の〔資料〕1として含まれています。この本の本文<PART 1>は、「元原発技術者が言える原発の危険性」で、総合的な怖さについて描いています。そもそも平和時から、放射線被害が起きていること、そして、原発の全体図を掲載しているのですが、膨大な複雑なシステムで成り立っていて、「原発の全体を隅々まで一人で理解している技術者はこの世に一人もいない」42Pと書いています（だから、フクシマのときに、右往左往していたのです）。

そして著者は原発技術者として、冷却ポンプの設計を手始めに、防御服を着てメンテナンスを担った経験から、身をもって知る放射線被害の恐ろしさについて書いてくれています。とりわけ、論じられることの少ない内部被曝の問題を取り上げています。

<PART 2>の「事故のあとだからこそ言えること」では、原発問題とリンクする著者の世界観なりから、短いエッセー的な文を書いています。共鳴し得ること多々です。

〔資料〕2では著者が、放射線被害の恐ろしさについて、小学生にも分かるようにと作った紙芝居「ちいさなせかいのおはなし」を掲載。〔資料〕3は「内部被ばくについての基礎知識を得るための参考書の紹介」を書いています。

さて、あるうる、この本への原発推進派の批判について、この著者自身が反論しているのですが、わたしなりにこの本から学んだことの復習的意味を込めて反論しておきたいと思います。それは、この著者が放射線被害についての専門家ではないということです。わたしがこのような文を書くこと自体は、まして何の専門性ももたないものとして一蹴しようとする常套句として「専門性」なる語があるのです。しかし、そもそも、被害ということがよく分かっていないということがあります。専門家の専門性がそもそも危ういのです。素人の方が、生きる中で得る「皮膚感覚」のようなことも含めて、そして素人だからこそもつ素朴さで、恐ろしさを感じることがあるのです。それなりに出ていることがあります。それだけでも、十分なのですが、この著者も書いているのですが、例えば、薬の治験などでは、安全性が立証されるまでは使用しないとなっているのに、原発は明らかな危険性が立証されないと止めないと、逆転しているのです。すでに、スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマと事故が起きているので、危険なことは事実として示されているのに、今度は確率論など、新たな「安全神話」を作りだしています。そもそも、「[リスク (R)] = [事故・故障の確率 (P)] × [事故・故障による被害・損害の大きさ (D)]」なのに、後項を無視しています。69-70P

以前は、これに加えて、経済的効率性ということでした。ですが、これは事故後、その補償の甚大性、そして廃棄物処理費用も含めると、もうこんなもの動かせないという結論しかできません。そしてそもそも何のために維持しようとするのか、という問題が今透けてきています。それは核兵器を作れるようにしておく、ということなのです。

最後に、もう一つ自分でも整理仕切れないまま、書き置きたいことがあります。「共鳴し得ること多々です。」と書きましたが、障害問題を論じてきたわたしの立場からすると、わ

たしが課題にしてきた「障害の否定性」を否定する」というところで、共鳴しにくい文が出てきます。被害をきちんと指摘していく、「悲惨さ」を論じるところで出て来ることなので、そして著者も差別につながるようなことを、一応押さえているひとのようで、差別につながるないように極力抑えた展開なのですが、このあたり「水俣病」の公害被害の問題から論じられてきたことで、わたしとしても色々書いてきたこと、わたしとしては、もう少しどう提起していけばいいかを整理していきたいと思ったりしています。

さて、いつものように切り抜きメモです。

(平時においても)「乳がんによる死亡率が圏内では圏外の3倍になるという。」 34P

「今、原子力規制委員会によって審査されているのは重大事故を防止するための「必要条件」であって「十分条件」ではない。／そのことは規制委員会自身が「この規制基準を満たしたからといって絶対に安全ということではない」と公言しているから確かである。」

64P 事故当時の福島第一原発の吉田所長が「東日本壊滅を想起した」ということを政府事故調の調査で語っているのですから、事故の確率論などで動かせるわけではないのです。まして、原因究明もできていない、事故収束もできていない状態で。

「3・11 フクシマ事故の悲劇を見ながらなお原発を利用しようとする人々は「原発ありがた教」という宗教の信者と呼ぶべきではないだろうか。」 65P

「スウェーデンの国家の将来像は次のようなものだ。①持続可能な社会であること、②次の世代に負担をかけないこと。／これだけでも原発をどうするのか考えるのに大きく影響するのに、さらに、所長さん(六本木にある「スウェーデン社会研究所」の所長さん・・・引用者)が言うには、「技術的なこと以前に日本の社会はスウェーデンの社会に民主主義の成熟度で四百年の遅れがある。スウェーデンには何をすることも、住民の納得を得なければならぬ」という法律が決められている。」・・・(後略)・・・」 106P

映像鑑賞メモ

わたしは高校生くらいから映画が好きで、「映画評論家」になろうかとちらっと思った時期もありました。古い映画をやっている映画館ではしごで観たりしていました。映像というのは、書物などより、よりビビットに伝わるものがあります。自分で観てもらうのが一番で、文字にしても今一伝わらないのですが、映画に誘うための一助となればと書いてみようと思います。沖縄は、わたしにとって、原発問題と並ぶ、「反対の意思表示をしなければ賛成しているのと同じ」ということで、きちんと発言してこなかったことを反省し、対象化し反対の意思表示をするための学び、という意味も込めて通い始めた映画鑑賞のメモです。

たわしの映像鑑賞メモ 001

・三上智恵監督「戦場ぬ止み (いくさばぬとうどうみ)」 2015

この映画は、沖縄の辺野古埋め立て基地建設への反対の闘いのドキュメンタリー映画です。

基地建設の埋め立てのためのボーリング調査が始まっていて、その阻止の闘いが今、現地辺野古でゲート前の座り込み・「寝込み」、そして船、カヌー隊を繰り出し、まさに体を張った闘いになっています。映画のチラシに「2014年8月14日辺野古沖は「包囲」された沖縄は再び戦場（いくさば）になった」とあります。警察官、海上保安官の暴行の中、そして、沖縄県警という沖縄のひとたち同士のぶつかりあいとその中で訴えかける叫び、機材を運び込むトラックの運転手への訴えかけ、そして容認派にさせられてしまった「運動きらい」の海人（漁師）とのふれあいという形で、まさに、なぜそこに落とし込まれていくのかという問いかけ、とらえ返しをしながらのこころ揺さぶる運動なのです。大間原発の反対の運動を長年続けているひとの本・野村保子『大間原発と日本の未来』寿郎社2015で、原発容認にさせられていったひとたちの思いも組み込もうとする運動にそれはつながっている、新しい運動なのではないかなどと思っています。

幾人かのひとたちに焦点をあてて、時間を追って話は進みます。知事選で翁長知事の当選、そして衆議院選の小選挙区で反基地のひとたちが全議席を占めたという島ぐるみ闘争の感を呈しているのに、それでも「肅々と」と民意を無視して、対話のない強行姿勢で、コンクリートのかたまりで珊瑚をつぶし、ロープで囲い込みボーリング調査が進められ、それに対してまさに体を張り、いのちも賭ける思いの闘いになっています。

丁度、沖縄戦のドキュメンタリーを6月14日NHK総合でやっていました。この映画の中で「文子おばあ」が語っていた体験とつながり、まさにヨーロッパ総体を覆う「アウシュビッツ」の「傷」に類比しうる心の傷を沖縄のひとたちは抱えて生きているのだとの思いも持ちました。

日本が沖縄を切り捨て、そして押しつけてきたことに、わたしがきちんと反対の運動をしてこなかった反省の念をもった怒りと、長年闘い続けてきたひとたちのしたたかさとユーモア、やさしさ、そんなことに涙しながら、この映画を観ました。とてもすてきな映画です。

この映画のタイトルは、ゲート前の闘いで掲げられている琉歌からきています。11月とは知事選のあった月です。それで、勝利して闘いを終わらせようという思いがあったのですが、勝利の後にも民意を無視して、基地建設は進められています。）

今年 しむ月や	くうとうし しむちちや	今年の十一月にこそ
戦場ぬとどみ	いくさばぬとうどうみ	戦場にとどめを刺して終わらせよう
沖縄ぬ思い	うちなぬうむい	沖縄の思い
世界に語ら	しけにかたら	広く世界に知らせましょう

この映画監督三上智恵さんは、琉球朝日放送でキャスター・ディレクターをしているときに「標的の村」という沖縄・高江のヘリパット反対運動のドキュメンタリーを作り、そして退社して、フリーのジャーナリスト・映像作家として活躍しています。インターネットで「三上智恵の沖縄（辺野古・高江）撮影日記」を発信しています。

映画は、今、辺野古反対の運動が大きな転換点にきていることで、急遽先行上映中です。ポレポレ東中野で7月10日まで先行上映、1日1回15:40～。本上映7月18日～

本も出ています。三上智恵『戦場ぬ止み(いくさばぬとうどうみ): 辺野古・高江からの祈り』大月書店 2015、入手しています。今読書始めました。近日、ブログで読書メモを書きます。

たわしの映像鑑賞メモ 002

・柴田昌平監督／大兼久由美・小泉修吉プロデューサー「ひめゆり」2007

この映画は、映画を作った監督が、ポレポレ東中野の経営者と交渉して、毎年6月23日の沖縄慰霊の日を挟んで、リバイバル上映している「ひめゆり」学徒の証言を集めたドキュメンタリー映画です。「ひめゆり」のひとたちが、自分たちの証言を映画に残したいと企画を持ち込んで作られた映画ということ、証言は22名です。沖縄にはひめゆり記念館があって、そこで語り部として体験を語っていたひといたのですが、以前新聞に実際体験したひとが「語り部」の役を全員降りたという記事がありました。まさに、その体験が深い傷になっているということが、証言からも伝わってきます。語ることによって、傷が浮かびあがってくるという側面と、語ることによって苦しみをはき出すことによって、少しは楽になっていく両側面があるのでしょうか？ 生き残ったひとで、語らない、語れないひとが20名いるという話もありました。心の深い深いところに閉じ込めて生きるということが、どのような傷としてあるのかと想うに、その傷の重さを感じざるを得ないので。

まさに、生死をわけた偶然と、そしてそれでも、生死を分ける、生と死への思いということが、うかびあがってきます。招集されたとき赤十字の旗の下で看護に当たるというイメージだったのが、そんなものは全くなく、そこはまさに戦場であったという話がくり返し出てきます。多くのひとが「軍国の少女」としてあって、最後まで日本軍が救いに来るとかいう思いにとらわれていて、捕虜になることは国賊になるとか、辱めを受けるという思いの中で、死に直面する中で「お母さんに会ってから死にたい」という思いの中で、生き延びたという話がかなりのひとから出ていました。今、戦争法案が国会に上程されているのですが、戦争に前方とか後方とかない、「国民を守るための戦争」ということが大うそであるということが、伝わってくるのです。

わたしが映画を観た日には、映画のプロデューサーが上映後トークショーをしました。上記のわたしのメモの中の文とも重複しているのですが、沖縄でアメリカ軍の撃墜された飛行士を日本軍が殺したという事件で、戦後、戦争犯罪の裁判があった中で、現地で徴用された（中には数日前に徴用された）沖縄のひと裁判にかけたことがあったそうです。そこで、最初死刑判決を受けた沖縄のひとを救おうというところで、沖縄研究者の出された意見陳述書で、「日本には武の思想があるが、沖縄の思想は非武の思想だ」という話があり、結局、沖縄のひとは（そもそも加担の違いということもあったのですが）、無罪になったそうです。この非武ということは、日本と中国の武力のはざまの中で、沖縄が生き延びていくための思想として身に付けたという話、その非武の話が、現在の戦争法案の議論の中でのひとつの方向性を示しているのではないかという話にもつながっていました。

ポレポレ東中野という映画館で、6月20日～26日まで、1日1回レイトショー20:30～20日26日にプロデューサー、23日は映画監督のトークショーがあります。

・ジャン・ユンカーマン監督「沖縄 うりずんの雨」2015

フェイスブックでこの映画のことを知り、この監督と鑑賞メモ 001 の「戦場ぬ止め (いくさばぬとうどうみ)」の三上監督のトークショーのある時間にあわせて観に行きました。

トークショーの中でも話されていたのですが、この映画は「戦場ぬ止め (いくさばぬとうどうみ)」とセットにして観ると「戦場ぬ止め (いくさばぬとうどうみ)」の辺野古の闘いの背景がよくわかるのです。別にはじめから繋がって企画されたわけではないようですが、まさにリンクしているのです。音楽を共に小室等が担当しています。

「うりずん」とは、「潤い初め (うるおいぞめ)」が語源とされ、冬が終わって大地が潤い、草木が芽を吹く3月頃から、沖縄が梅雨に入る5月くらいまでの時期を指す言葉 (パンフから)。沖縄戦の時期に重なるため、戦後70年経った今もこの時期に体調を崩すひとが多いとのこと。

「プロローグ」でペリーの沖縄上陸から歴史の概略を描き (基地が占める現状、そして「返還」後のヘリ墜落時にアメリカ軍が現場を仕切り報道をシャットアウトした、占領時と同じように対応したことが描かれ)、「第1部 沖縄戦」、「第2部 占領」、「第3部 恥辱」、「第4部 明日へ」となっています。アメリカ軍の映像や、沖縄のひとへのインタビュー、アメリカ軍元兵士へインタビューも織り込んで、あの戦争がどういう戦争であったのか、占領ということがどういうことだったのかを描いています。3部の「恥辱」は、戦後ずっと伏せられていた、アメリカ軍の上陸した近くに潜んでいたガマ (洞窟) での集団自決事件での生き残ったひとの証言をとりあげ、もうひとつの事件の「アメリカ軍兵士三名による少女レイプ事件」を取り上げています。その中で、「犯人」のひとりの兵士をアメリカでインタビューした映像が出てきます。「自分は地獄に行くのはわかっている」「被害者の少女に許しを請いたい」という発言はあるのですが、この監督自身が語っているように、この事件で、自分の人生がめちゃくちゃになってしまったという後悔が主になってしまっているのです。今、日本の神戸事件での加害者の手記が話題になっていて、二度殺されたという被害者の親の発言も出てきます。トークショーの中でも、三上さんがこれを観ていて、吐き気までしたと語っていました (このことを映像にすることの是非の問題もあるのでしょうか。わたしは特に、この小学生の子が今どうしているのだろう、この映画でとりあげられることで傷つけられ続けることを思ってしまうのです)。神戸事件の加害者は反省ということ自体が問題になっています。この映像を敢えて使ったのは、この兵士がむしろ、ふつうの兵士というか、むしろやさしげな兵士で、インタビューを拒否した主犯格の兵士に引きずられてやってしまったというところで、戦争や軍の中でかなり頻繁に起こってしまうことととらえられます。この背景のようなことを、この監督は丁寧に描き出しています。この事件は氷山の一角で、アメリカ軍の兵士の中でも女性兵士へのレイプ事件が頻繁に起きていて、それを告発している会での集会の様子なども描いています。加害者の背景ということで、あえて取り上げ描いた映画で、そのことが投げかける意味は大きいとは思いますが。

ドキュメンタリー映像の監督の手法として、三上監督もそうですが、多くを語らず、客観的に映像に語らせ、そこから観る者が感じ取る、思いをはせるという手法がとられている

ます。この映画はナレーションも監督自身が務めているのですが、それでも語りを極力抑えています。プロローグで基地反対しているひとたちが、フェンスにリボンをくくり、ガムテープを貼り付けているシーンがあるのですが、「明日へ」の中では、それを米兵と一緒に「清掃」としてはがす沖縄のひとたちが出てきます。それも淡々と描き、米兵とその兵士と一緒に「清掃作業」をするその沖縄のひとたちにインタビューしています。女性米兵が語っている話として感じたのは、米兵には日本を守るという発想はないということです。アメリカ本国を守るために、ここに前線を引いているという発想なのです。まるで、先の戦争で沖縄が日本を守るための捨て石にされた、というより、日本兵から自死を迫られ、殺された事実とかさなっていくます。米軍が日本を守る、日本が沖縄を一国民を守るという虚構がみえてくるのです。まさに、アメリカと共に戦争に突き進むための辺野古の基地建設ということが見えてくるのです。

この映画は、7月末まで岩波ホールで上映されています。三上監督の映画はポレポレ東中野で、7/18 から本上映です。わたしは逆の順で観たので、もう一度リピーターで観に行きます。「うりずんの雨」→「戦場ぬ止み」がお勧めです。

たわしの映像鑑賞メモ 004

・三上智恵監督「戦場ぬ止み (いくさばぬとうどうみ)」2015 リポート

7月18日から本上映が始まりました。リピーターで行ってきました。前に観たときよりも涙し、運動が押しつぶされていく状況にくやしいという思いももって観ていました。それでも「明るい」、冗談や、知事選・衆議院選での勝利にはじけるような喜び、歌や踊りの輪の中に入っていきような、笑いや喜びの感情も出てきます。

わたしが観た会は、監督のトークショーがあり、その中で、宮古島・八重島で自衛隊の沖縄の新たな基地建設が進んでいるという話が冒頭に出ていました。地対艦ミサイル基地の建設や島の奪還上陸訓練などが計画されている基地で、まさに戦争準備が着々と進められている、その中でまさにまた沖縄が戦場にされるという危険性が増しているのです。その基地反対が非暴力ですが体を張った実力闘争になっていて、まさに戦場になっているところでのこの映画の表題にもなっています。先行上映の時のトークショーはYouTube で観たのですが、まさに沖縄のひとたちが、水道管が破裂していて水が噴き出しているのを必死でそれを押さえている状況なのだという話がこの監督から出ていました。ですから、今、国会前や各地で起きている戦争法案反対の運動と連動して、この戦争への道を、そして戦をなくすための闘いを進めることが、できるひとが、できることから、できることを探して進めて行くことが問われているのです。というところで、わたしもこのメモでとりあげ拡散させていきます。

まずは映画を観て欲しいのです。そして映画の本や、YouTube のビデオなどを拡散させてくださいー

・三上智恵ディレクター「標的の村」琉球朝日放送版

前文で書いたのですが、この監督には琉球朝日放送のキャスター・ディレクター時代に作った「標的の村」というドキュメンタリーもあります。東村・高江のヘリパット基地建設反対運動を描いたものです。見逃していて、最初に琉球朝日放送で放送された短めの映

像が、YouTubeにあったので、それを観ていたのですが、オスプレイの配備に対して、普天間基地封鎖の実力闘争も出てきます。車を並べ、座り込みをし、ごぼう抜き・リッカー移動されていくのですが、安里屋ユンタ（元歌は八重山農民の抵抗の歌）を車の中で歌っているシーンでは涙が止まりませんでした。

「戦場・・・」もこの「標的の村」も、家族ぐるみ闘争になっているので、子どもが出てきています。運動の中で育っていくのですが、親も、そして監督も子どもを運動に巻き込んでいくことへの躊躇があるのです。監督は、何か運動誘導的な質問をしてしまうことに、反省を繰り返しているのですが、この子ども達が、とても愛らしいのですー

この映画版も、自主上映会などがやられているし、きっとまた映画館でも上映されるので、観に行こうと思っていますー

『反障害原論』への補説的断章（22）

モリスの「障害の社会モデル」批判がもつ意味

モリスを読むという宿題がまだ果たせていません。今、少し展望が開けているのですが、別のところからヒントが出てきて、モリスの言わんとしているだろうこととリンクしているのかなと思っています。覚書的にちょっと書いて置こうと思っています。

「社会モデル」批判に、「社会モデル」は「社会」の責任というところで、差別する個人の責任をスポイルしている」という批判があります。「社会」を実体化しているというわたしの批判ともそのことはリンクしています。「踊る走査線」というテレビドラマがあり、それを映画化もしています。その中で「事件は会議室で起きているのではない、現場で起きているのだ」という主人公の台詞とわたしの中でリンクしています。モリスの「障害の社会モデル」は現実の障害者のいきぐるしさをとらえようとしていない」という批判は、「現実の差別が起きている現場を押さえようとしていない」とずらして押さえる事ができます。ずらすというのは、モリスはどうも、「いきぐるしは差別だけではない」という内容になっているのではないかと思えるのです。このことは、きちんと展望が開けたときに、もう一度、モリスの文に即して押さえ直します。

さて、「社会が差別する」といった内容は、一体何をさすのでしょうか？ 現実に差別をしているのは個人だ、と言い得る側面もあるのですが、その個人も共同主観的意識—「社会意識」に規定された「個人」であるということがあります。そして、「政策や制度が差別する」ということもあります。そこで、また、政策や制度を作っているのもひと（「個人」）であるという面もあります。日々の日常生活の物象化された相の中で、差別の構造があるという言い方もできます。実はこのあたりのこと、廣松渉というひとが、遺稿『存在と意味』で展開しようとしていたこととリンクしたのです。第1巻が「認識論的世界の存在構造」、第2巻が「実践的世界の存在構造」、第3巻が「文化的世界の存在構造」です。そして、第2巻の「実践的世界の存在構造」の第一篇「用在的世界の四肢構造」第二篇「營為的世界の問題構成」となっています。実は廣松さんはここまで書いて亡くなったのですが、第三篇が「制度的世界の存立機制」なのです。まさに制度ということがどのように成り立

っているのかを描こうとしていたのだととらえ返しています。そこから、ひとの関係性の中での営為が制度というところとどのように結びついていくのか、そのことを分析していくことが問われています。廣松さんは、もう続編を書くことはできません。草稿がどこまで出てくるのかがありますが、それを引き継ぐひとが出てくるかも、余り期待できません。廣松さんは博学で自分の論攷の中に、よく他者の論攷を引用して、そこから自分の論を展開していくスタイルをとっていました。これまでの廣松論攷を押さえたところで、この制度論的な展開の一端を物象化批判として、モリスの論攷との対話から少しでもなしえることがあるかも知れないと考えたりしています。まとまったものにならないとしても、少しでも試行錯誤的なものを残す作業をしたいと思っています。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 53号」アップ(15/8/11)
- ◆HPの容量がオーバーしてきて、「反障害通信」の旧い号を消去し始めました。バックナンバーの欲しい方にはメールなどでお送りします。
- ◆ホームページもブログも少し読みやすくするために整理しようと思っています。宿題の作業が落ち着いてから。読書メモに出している本を参考文献として、アップしていく作業もやっていかななくては、そして、著者との対話として、それを届ける作業もしていかなくてはとも思っています。
- ◆「障害ってなーに？」を題名を替えて、いつくか削除し、大切な肝心な章を書き足して出版化を試みます。そのために、とりあえず近日中にHPから削除します。

(編集後記)

- ◆やっと宿題の校正を終えて、一息つきました。出版化の作業と他の宿題、そしてやり残していた事務作業をひとつひとつやっていきます。
- ◆巻頭言の文は引き続きアベノ政治批判です。戦争法案に関して、説明不足、わかりにくい、論理的に破綻していると言われていることは、実はアベノ政治のダブルスタンダードの間で行きつ戻りつしていることとして、読み解けることです。読みやすくするために付録として表にしてみました。
- ◆反原発の毎週金曜の官邸前集会にはほぼ毎回参加するようになって、その後国会前のSEALDsの集会にも参加するようになっています。SEALDsの活動は今までにないユニークな活動ではないかと感じています。だんだん人数が増えてきて、警察が集会つぶしの規制に入ってきていました。SEALDsの集会をやっている歩道に通じる「国会前」の交差点を黄色いテープを張ったり、スクラムを組んだりして通せないようにしたりするのです。

「混み合っている」という理由の「交通規制」というのですが、SEALDsの集会は出入りが多くて、入る人を規制すると帰るひとの分空いてきて、明らかに「混み合っている」という状態でないのがはっきり分かるのに、こんどは「指揮者との連絡が取れない」とか、意味不明の理由で通さないのです。「有事法制の遂行訓練」とかも感じさせ、警察の誘導に「言うことかさせる」という事が見えてきて、わたしと同じ年代のひとたちが、抗議していました。「指揮系列が混乱している」なんて、まるで警察の 2.26」などと想起したのです。まさに、「ウソとごまかしと無責任と対話なしのアベノ政治」に連動したファシズム的な動きと危機感を募らせて、写真を撮ってSNSで流したりしていました。SEALDsは警察は味方に付けるという方針のようなので、警察との衝突は避けることなのですが、ファシズム的な動きを放置できないという思いもあり、どうしたものかと思っていたのですが、今回は「国会前」の交差点に警察官がひとりもいなくなっていました。SEALDsは「柳に風」のしなやかな活動スタイルで、いろいろ考えながら動いているようです。

◆最近、フェイスブックで発信を始めました。以前は、マスコミはきちんと情報を流さなくなっているので、情報収集に必要だからと、受け身の関わりしていませんでした。公開で議論したり、情報のやりとりしているようなことで、おそろしさがあるのですが、沖縄の辺野古の基地建設反対闘争で、警察官の目の前で弾圧の対処法の確認をしたりしているのを見たりしていると、新しい形の民衆の抵抗の運動形態として、堂々と公開でやっていくことの中に、広がり求めていく必要も感じていたりしています。もちろん、ファシズムの突撃下での大弾圧のこともちゃんと考慮しておくことは必要ですが。

◆わたしのやろうとしていることをなかなかきちんとことば化しえないのですが、大政治状況ととらえられることがあります。今、国会に上程されている戦争法案のようなことです。それをハード的なこととすると、もう一方でソフトな、ひとのいのちと日々の営みにおけることを、人間観・世界観において掘り下げていくような作業、それをわたしは認識論的なとらえ返しをしながら反障害論として展開しています。前回の読書メモに書いた、山口さんの本と講演の話の「ソフト」の話にリンクしていることです。確かにハードな動きは、人権や倫理で蓋をしていたことの蓋を吹き飛ばし、差別主義がパンドラの箱のように吹き出していくこととして対処していかなければいけないのですが、それ以前に、人権や倫理で蓋をするのではなく、きちんと反差別の論理と思想から、差別に対するソフトな闘いを積み重ね、育てていかななくてはいけないと考えています。

◆読書メモは、原発関係が主です。沖縄とアベノミクス関係の本も。299は急遽挟んだ本ですが、これは思うところあって、しばらくオクラ入りしておきます。

◆前回予告したように、映像メモを始めました。今回は沖縄特集です。映像メモの最後に書いている映画の上映の日には、この号の発刊の時にはもう過ぎています。「通信」のメール読者には臨時にメール添付で送りました。また、フェイスブックでも、ブログに仮掲載し、アドレスをはり付ける形で案内を送りました。「名残り」として残しておきます。いずれも、校正を入れているので少し変わっています。

◆今回も、「フクシマを忘れない」は、原発関係の読書メモを書いているのでお休みしました。

◆毎回のようには書いているのですが、次回も宿題の関係で、遅れるかもしれません。

反障害－反差別研究会

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>